

マジョリティのための社会調査？

——小特集「マイノリティ研究の新たな次元」
の序によせて

亀井 伸孝*

キーワード：マイノリティ、マジョリティ、社会調査、温度計、調査のバイアス

本 COE 『『人類の幸福に資する社会調査』の研究』において、なぜマイノリティ研究が重要なのか。「マイノリティも人類の一部である」というしごく当然の理由以上に、積極的な位置づけがあってよいだろう。「そもそも一体だれがマイノリティなのか」という問題が検討されるべきなのはいうまでもないが、そのことも含めて、私たちは「マジョリティ／マイノリティ」の枠組みを常に念頭に置きながら、社会調査を企画、遂行する責務があると考えている。

だれにとっての騒音問題？

たとえば、あるマンションの住民を対象とした、騒音問題をめぐるこんな意識調査があったとしよう。

(A) あなたは隣家の物音が気になりますか？

はい／いいえ

質問紙の回答を集計し、仮に「はい＝70%、いいえ＝30%」という結果が

*関西学院大学

出たとき、「70%の人は隣家の物音に敏感で、30%の人は物音に寛容である」と解釈するとすれば、それは誤りである。なぜなら、この社会には耳が聞こえない人たちがいるからだ。耳が聞こえない人にとって、音は生活世界を構成する要素ではない。寛容かどうかという意識を問う以前に、その前提が共有されていないのである。

一方、ろう者にとっての「騒音問題」はまったく別のところにある〔秋山・亀井, 2004〕。ろう者自身が隣家の音に悩まされることはないが、自分の暮らしの中で、たとえば部屋の中を歩いたり扉を開閉したりするとき、自然と物音が出ることがある。周辺住民の中にそれを気にする人がいて、苦情が舞い込んできたときに問題が起こる。自分では音を感じていないので、ふだんの暮らしの何をどうコントロールしたら「物音」なるものが減るのか判断しがたい。ろう者としての平常の生活と価値観が他者から部分的に否定されることでもあり、対処のしかたをめぐる葛藤が生まれる。

逆に言えば、世界がろう者ばかりだったらこういう問題は生じないだろう。実際、ろう者の学生ばかりが集まって暮らす大学の寮では、物音を気にする人が一人もいないのでかえって気楽だという〔秋山・亀井, 2004〕。つまり、「騒音問題」という概念が存在しない世界。ろう者にとっての究極のユートピアであろうか。

だから、もしろう者の価値観を基準とした意識調査を行うとしたら、こういう調査項目から始めることになるだろう。

(B) あなたは物音を気にする周辺住民のことが気になりますか？

はい／いいえ

この問いから、騒音をめぐるろう者の意識調査が始まるのである。それは出発点からして、耳が聞こえるマジョリティとは異なった姿を見せている。

社会調査におけるマジョリティ／マイノリティ問題

ここで示した仮定の意識調査の事例から得られる教訓を三つ挙げたい。

一つ目は、調査のデザインにおける心構えである。(A)の問いには、「社

会の構成員はみな耳が聞こえ、隣家の物音を知覚し、かつ求めに応じて自分の物音をコントロールする人々である」という前提があった。騒音を主題とする調査をデザインするならば、まず「音の感覚をもつ人／もたない人」の両方が社会にいて、そのどちらもが調査対象に含まれるだろうという想像力が必要である。その上で、それぞれにおける騒音への意識や問題のとらえ方、価値観、文化がまるで異なっているかもしれないという可能性を、あらかじめ想定の中に織り込んでおく必要がある。

二つ目は、調査方法の選択である。もしもこれがインタビューだったら、相手が耳が聞こえないことは会ったときに分かるだろう。手話通訳を通して話を聞く中で、特有の事情を知ることができるかもしれない。さらに住み込みのフィールドワークによって、たとえば例のろう者が集住する学生寮に何カ月も暮らすことがあれば、固有の価値観、行動様式、分類体系、表象、コスモロジーなどを含むろう者の文化全体を経験し、エスノグラフィーの方法でその世界の合理性を示すこともできるだろう。一方、質問紙調査など、数を多くこなすことが求められる調査方法においてはどうか。数にまかせてマイノリティの存在が忘れ去られたり、特殊な事例として母集団から外されたりすることはないだろうか。もしそうだとすれば、私たちは何らかの工夫でそれを乗り越えることが求められる。

三つ目は、調査者の問題である。ここまでは漠然と「マジョリティ＝調査する側」であるかのように前提していたが、マイノリティ自身が調査者になるケースを考えてもよいはずである。とりわけフィールドワークなどを含む質的調査では、自文化を内在的な視点から記載する「ネイティブの人類学 *native anthropology*」の手法の方が、いっそう効果的かもしれない [Kuwayama, 2004]。多様な方法を組み合わせることで豊かな認識が得られるのであれば、「だれが調査するのか」という問題にも取り組む必要があるだろう。

社会調査は、温度計に例えることができる [真鍋, 本誌掲載論文]。温度計は「世界の多くの人びとの使用の便宜性を前提として作成」されるため、時代や地域が異なれば、当然、有用な温度計（社会調査）も異なってくる。さらに、マジョリティとマイノリティにおいて温度計が異なることもあるだ

ろう。先の騒音問題に関する調査の事例では、それぞれが異なる価値観をもつために、異なる温度計を設計する必要がある、温度計の選び方に注意する必要がある、さらにだれが温度計を使うのかを考えるべきだった、ということになる。

この小特集が組まれるまで

2004年度に本 COE の一環として開かれたある研究会で、マイノリティをめぐる議論が交わされた。質問紙調査に関する討論の中で、「質問紙調査はそもそも文字が読めない人がいるということを想定しているのか」という疑問が出された。質問紙が立脚する前提を崩してしまう身もふたもない指摘だが、ある意味でマジョリティに目が向きがちな社会調査の本質を突いていた。実際、識字教育を受けていないオーストラリア先住民に対して質問紙を配った博士がいたという話があるが、もしそれに基づいて政策が実行されることがあれば、これは笑い話では済まされない [飯嶋, 2004]。

人類全体を視野に入れた社会調査をデザインするにあたり、マジョリティ



世界の非識字人口
9億人 (ユニセフ)

質問紙調査は文字が読めない人がいることを想定しているか

寄りのバイアスがかかった調査方法や、それに基づく認識、実践が問い直されるのは当然のことであろう。私たちの COE は、マイノリティをめぐる問題との格闘を避けては通れない。

以上のような認識に立って、2005年4月6日、COE シンポジウム「マイノリティ研究の新たな次元」が企画された。いきさつから考えても、それは「いかにうまくマイノリティを調べるか」をめぐる議論ではありえなかった。そもそもだれが、だれを／何を、何のために調べるのか。また、調べることはたしてできるのか。そのこと以前に、ある人々を一括りに「マイノリティ」と名指し対象化すること自体が、バイアスと抑圧の始まりではないか。しかし、そのようなカテゴリーをめぐる言説の中で研究者が逡巡を続けるのではなく、いっそ実践的な関与や協働の中に調査を位置づけていくべきではないか。

パネリスト、コメンテータ、フロアが入り交じっての議論は長時間にわたり、社会学、社会福祉学、社会心理学、人類学の諸領域を横断しつつ、社会科学における認識論の問題にまで行き着いた。

シンポジウムの概要と本小特集

この小特集は、そのシンポジウムにおける主な二人の発言者に、それぞれの立場からのマイノリティ論を展開していただいたものである。

野波寛ほかによる「上位目標達成を通じた集団間のメタステレオタイプと社会的アイデンティティ」(本小特集収録論文)は、集団間のまなざしの問題を取り上げている。人にどう見られているかを気にしてしまうのが人間だが、とりわけ二集団の間に優劣関係がある場合、劣位集団は「相手にどう見られているか」を自ら予測し、それが社会的アイデンティティのあり方を大きく左右する。まさしく偏見や心的抑圧が生み出されるメカニズムの暗部を、実験的手法により探ろうとする。

一方、武田丈による「PLA によるマイノリティ研究の可能性」(本小特集収録論文)は、「当事者参加型リサーチ」の有用性を紹介し、マイノリティ自身による調査に可能性を見ようとする。「マジョリティ＝調査する側」と

いう特権性を批判し、当事者の調査力に注目する立場は、村人自身が二世紀以上にわたって自らを調査、記録し続けた「村の日記」に関する研究〔古川、2005〕の問題意識とも通底している。

以下では、この他のシンポジウム登壇者（真鍋一史、三浦耕吉郎、亀井伸孝）の論点を、参考までにかいつまんで紹介しておきたい。

真鍋は『『社会調査データ』におけるマイノリティ』と題し、質問紙調査という方法が確立された歴史的経緯や、大規模データ分析（large scale data analysis）における「逸脱事例（少数事例）」の扱いという問題に注目した。また、米国の「人口調査」や日本における言語的マイノリティに対する調査の事例を引きながら、社会調査のもつ基本的な課題について述べた（関連するテーマを含む真鍋「社会調査と社会学理論」〔本誌掲載論文〕もご参照いただきたい）。

三浦は「関係のカテゴリー論からみた『マイノリティ』の『幸福』とは？」というテーマのもと、「マイノリティ」と「マジョリティ」、「主観的幸福」と「客観的幸福」といった従来の二分法的な枠組みを超えるためには、「マイノリティ」や「幸福」を関係論的に把握する必要があることを指摘した。「マイノリティ」を実体として把握しがちな社会調査に疑問を投げかけるとともに、「幸福」を計るための観察者視点に立った一次元的な尺度が、当事者が生きている関係的な（状況依存的な）「幸福」を把握し切れていないのではないかと問題提起した。

私（亀井）は「もしもマルコム X が人類学者だったら」と題し、マジョリティ出自の研究者がとるべき姿勢について、方法的・倫理的側面から論じた。アメリカの黒人運動家／思想家マルコム X が提起した問題を参照しつつ、マジョリティがマイノリティへの関与のしかたをめぐって認識論的・運動論的に逡巡を続けるよりも、適切な分業に基づいた理解と実践を進めることが重要だと主張した。

対象、方法、視角はさまざまだが、共通するのは以下の二つの立場である。一つは、「マイノリティ」なる対象をナイーブに設定するのではなく、関係と動態の中に位置づけようとする姿勢である。もう一つは、個別のマイ

ノリティ集団の研究に取り組みつつも、それに特化するのではなく人類全体の幸福の理解へと視野を広げようとする意志である。「マイノリティのつくり方と対峙しつつ、幸福のための全体社会理解へ」。いずれもシンポジウムの議論を通して確認されたことであり、また特権的な調査者であることに対する自省的な意識の現れでもあるだろう。

温度計は何を測ろうとするか

このように考えていくと、マイノリティ研究とは、他ならぬマジョリティの研究でもあることが分かる。日本における外国人問題を扱うと、あわせてそれを取り巻く日本人社会の特性が見えてくる。ろう者の文化を描くことは、同時にそれを取り巻く聴者の音声言語文化の知られざる一面を暴き出すことでもある。このような試みは、マイノリティを誤差の範囲におさめて済ませてしまう認識の態度と比べれば、はるかに豊かな認識の地平へと人々を誘うだろう。

もちろん、マジョリティが自画像を知るためにマイノリティや異文化を鏡として使う [Kluckhohn, 1949=1971] というのは、言ってみれば一種の利用主義でもあって、決してほめられた行為でもないだろう。しかし、自他を理解することを通してよりよい関係を構築しようとする道を社会科学が選んできている以上、それを放棄することもできない。

かつて Taguieff は、マイノリティに対する差別を「同化型」「隔離・排除型」の二タイプに分類し、それぞれに対する反差別の思想がもう一方の差別と親和的であると指摘した [Taguieff, 1987]。反差別の思想・運動までもが、別のタイプの差別に容易に転化させられてしまうという現実の圧力がある。こうした矛盾にマイノリティがしばしば直面させられる一方で、そんなことが進行しているとも知らないのがマジョリティの実態である。

マイノリティに対して「同化か、さもなくば排除か」の不毛な二択を迫り続けてしまう社会制度や社会意識を問い直すためにも、マジョリティは自画像を見つめる必要がある。少なくとも、折に触れて思い起こす機会が必要である。社会調査は、その病巣をえぐり出す有用なメスともなりうるだろう

か。それとも、マジョリティのご機嫌をうかがうだけの温度計になってしま
うのか。真価が問われている。

拠点形成に向けて

最後に、この分野に関するこれまでの本 COE の取り組みについてふれて
おきたい。

『先端社会研究』の既刊号においては、学内外の研究者によってマイノリ
ティの問題に関心を寄せつつ人類／社会全体の理解へとパースペクティブを
投げかける論考が発表されている [亀井, 2004; 三浦, 2005; 奥田, 2005;
好井, 2005]。

研究会活動としても、COE 指定研究「構造的差別を生きる人々の価値観
の多様性に関する研究」(代表: 三浦耕吉郎)、COE ワークショップ「多文
化と幸せ」(コーディネータ: 亀井伸孝)といった形での連続研究会がもた
れ、成果公開の作業が進められている。とりわけ前者の指定研究は、障害者
をめぐるセクシュアリティや介助にかかわる問題、在日や野宿者による不法
占拠や迷惑施設の建設といった「環境をめぐる支配」の問題、沖縄への／か
らの移住者のかかえる問題等をテーマとしながら3年間にわたって行われ、
これら〈関係性のフィールドワーク〉の成果の一部は、『構造的差別のソシ
オグラフィ』と題された論集として2006年3月に刊行される [三浦編, 2006
(予定)]。

大学院生の実績としても、在日外国人、異文化集団、ホームレス、障害な
どをキーワードとした研究群が、フィールドワークから社会心理学的実験に
いたるまでのさまざまな方法によって進められている。すでに一部は博士学
位論文としての完成をみており、さらに多くの若手研究者がその後が続くこ
とだろう。

属性も由来もまるで異なる人々をまとめて「マイノリティ」と名指し、配
列してしまうことの無理と難しさ、そして倫理的問題の可能性については承
知している。その上であえて「マジョリティ／マイノリティ」関係を主題の
一つとして常に念頭に置き、よりよい全体社会理解にむけた調査・研究・実

践の拠点を大学に築くことは、「人類の幸福」を看板に掲げたプログラムが欠いてはならない重要な使命の一つであるだろう。この小特集を含むさまざまな試みが、社会と学問の風通しをよくするためのささやかな手がかりになればと願っている。(文中敬称略)

文献

- 秋山なみ・亀井伸孝, 2004, 『手話でいこう——ろう者の言い分 聴者のホンネ』
京都：ミネルヴァ書房。
- 古川彰, 2005, 「生活知のくり出し方」『先端社会研究』第2号：237-67.
- 飯嶋秀治, 2004, 「幸せは複数形——『暴力』の2つの先鋭形態・オーストラリア先住民アランタの喧嘩とイラク戦争」関学 COE ワークショップ「多文化と幸せ」第2回(2004年11月8日).
- 亀井伸孝, 2004, 「言語と幸せ——言語権が内包すべき三つの基本的要件」『先端社会研究』創刊号：131-57.
- Kluckhohn, Clyde K. M., 1949, *Mirror for Man*, New York: McGraw-Hill. (=1971, 光延明洋訳, 『人間のための鏡』東京：サイマル出版会.)
- Kuwayama, Takami, 2004, *Native Anthropology: The Japanese Challenge to Western Academic Hegemony*, Melbourne: Trans Pacific Press.
- 三浦耕吉郎, 2005, 「手紙形式による人権問題講義——〈構造的差別〉のソシオグラフィの試み」『先端社会研究』第2号：331-57.
- 三浦耕吉郎編, 2006 (予定), 『構造的差別のソシオグラフィ』京都：世界思想社。
- 奥田道大, 2005, 「変容する都市コミュニティの普遍——都市社会学調査における『共在感覚』の発見」『先端社会研究』第2号：161-206.
- Taguieff, Pierre-André, 1987, *La force du préjugé: essai sur le racisme et ses doubles*, Paris: Edition La Découverte.
- 好井裕明, 2005, 「映画がもつ“啓発する力”を調べる可能性——『フリークス』を読む試みから」『先端社会研究』第2号：303-29.